

「国連大学 SDGs 大学連携プラットフォーム (SDG-UP)」第 25 回ワークショップ開催

2023 年 6 月 21 日、SDG 大学連携プラットフォーム (SDG-UP) の第 25 回ワークショップがオンラインで開催され、参加大学 20 校から 44 名が出席しました。今回は 2020 年 11 月の第 2 回ワークショップから 3 回講演していただいている Times Higher Education (THE) チーフ・データ・オフィサーであるダンカン・ロス氏をお招きしました。

冒頭の開会挨拶で SDG-UP チェア国連大学サステナビリティ高等研究所 (UNU-IAS) 山口しのぶ所長は、5 月末にサウジアラビアで開催された THE 主催の Global Sustainable Development Congress でロス氏と再会したと述べました。この会議には世界中から 1600 人以上が参加し、高等教育セクターと政府や産業界など社会全体のネットワークを緊密化し、持続可能な未来のためにアイデアやソリューションを分かち合う活発な議論が展開されたと報告しました。また、北海道大学のサステナビリティ統括チームも招待を受けてパネルセッションの中でスピーチを行い、SDGs の達成に向けたコミットメントについて発表を行ったことを強調しました。そして、インパクトランキングという大学評価を通して大学同士がコラボレーションして学び合い、2030 年以降の社会も視野に入れて大学は何ができるか考える実り多い会議だったと述べました。

福士健介アカデミック・プログラム・アドバイザーがロス氏の紹介を行ったのち **How the SDGs can change the perception of Higher Education** と題した講演を行いました。ロス氏は SDGs 達成を目指す上で他の組織や社会ができないようなことが大学では行えると強調しました。2015 年に設定され 17 の目標、169 のターゲットおよび 223 の指標を持つ SDGs は、世界が気候変動の最悪の影響を受けるのを防ぐための行動の道筋を示すものです。良好なパートナーシップを組み、十分な資源を投入し、積極的なアクションでバックアップしない限り目標は達成できません。目標達成に向けては、長期的な思考が必要です。世界には 35,000 校の大学があり、その経済活動は世界総生産の 1.7 パーセントを占めています。長期的な視野のもと経済的な影響力を兼ね備えた大学は SDGs に取り組むのに適しているのです。

SDGs のターゲットは非常に詳細で複雑であり、必ずしも大学に直接関係するものばかりではありません。そのためインパクトランキングでは、SDGs のターゲットから大学に期待される事柄を導き出すため、「変化の理論 (Theory of Change)」を構築しました。それに基づいて、1) 研究、2) スチュワードシップ (物理的、人的な資源管理)、3) アウトリーチ、4) 教育、4 つの分野にわたって、大学の SDGs に対する貢献度を評価し、バランスの取れた分析を行っています。

インパクトランキングが他のランキングと異なる重要な点のひとつは、定量的なデータ（数字に関連するデータ）だけでなく、定性的なデータにも注目していることです。定量的な数値測定が難しい項目については、定性的なエビデンスを出す形で提出することを要請しています。例えば **SDGs3** すべての人に健康と福祉をのターゲット **3A** 効果的な禁煙については、大学が喫煙を禁止しているかどうかを尋ね、同時にエビデンスの提出も求めます。大学に対して即答できず手間のかかる回答をしなければならない設問を用意した理由は、大学側が期待されていることを理解した上で、さらにその能力の開発に期待しているからです。エビデンスがウェブサイトなどに公開されている場合はさらに加点され、2人以上の評価者が精査し評価を確認しています。

今年の大きな変更点は、総合スコアの算出方法にあります。ランキングでは **SDGs17** に加え、その大学の強みを反映できる目標についてのエビデンスを提出し、スコアが高かった **3** 目標を合計しランキングの総合スコアを算出していました。今年からは **2** 年間の平均値を総合スコアとして出す形式に変更し、従来の方法で今年のスコアを算出し、前年のスコアとの平均値を出しています。これによりそれぞれの年の変動を平準化し、大学が余裕を持って強みとしている目標に時間をかけることができるようになりました。前年のみ算出している大学は今年のランキングには入れず、初参加の大学は今年のスコアで評価されます。

今年 **115** の国と地域から、少なくとも **1** つの **SDGs** に対して **1,705** の大学がデータを提供しました。上位 **100** 校は、世界各国に分散しています。世界大学ランキングでは、ヨーロッパや北米の大学が上位を占めていますが、インパクトランキングではアフリカやラテンアメリカ、中東やオーストラリアの大学が上位にランクインしています。日本では少なくとも **1** つの **SDGs** についてデータを提供している大学が **91** 校ありました。日本の大学のデータ提供が少ない **SDGs** は、**SDGs1** の貧困をなくそうと **SDGs4** の質の高い教育をみんなにです。**SDGs1** に関しては日本は比較的裕福な国であり貧困が深刻な国の大学ほど **SDGs1** が重視されないため、データ提出が少なくなります。また、**SDGs4** に関しては設問が年少期の学習について集中しており、人口の中で若年層が少ない日本はより若い人口を抱える国に比べて必然的に注目度が低下すると言えます。日本が良いパフォーマンスを示しているのは **SDG11** 住み続けられる町づくりをです。特に芸術や遺産の支援に関する持続可能な実践についての項目に日本の大学が焦点を当てていることを反映しており、国際的にも誇れる強みであると言えます。

SDGs17 のパートナーシップで目標を達成しようでは、大学が目標を支援するため、様々なセクターと構築している関係の広さと深さを精査しています。**SDGs** の目標間の協力関係がなければ他の **16** 目標の達成はできず、良好なパートナーシップを持つことはとても重要です。**THE** は取り組みの強みと弱みの異なる先進国と低所得国、中所得国の大学とのパート

ナートシップを推進しお互いに協力することで相補完的な効果が生まれることに関心を抱いています。トップ 100 には日本の大学が 4 校入っており、SDGs17 での日本の大学のパフォーマンスのさらなる向上が期待できます。

大学が SDGs に関する取り組みを報告書にまとめて公表することは重要です。ここでは、異なる 2 つのアプローチを紹介します。ウェスタン・シドニー大学の報告書では、テーマ別の活動を紹介し、それぞれを特定の SDGs に関連付けて掲載しています。グラスゴー大学はそれと異なり、SDGs の各ボタンをクリックすると、関連する活動ページを案内しています。どちらのアプローチも、大学が地域社会や世界全体にとってどのような意味を持つのかというストーリーを強調しています。報告書で成果と課題を公表し、持続可能性を明確にすることで、報告書の利用価値を明らかにしています。

ロス氏は、高等教育セクターが実践すべき項目をしてきました。第 1 にサステナビリティの取り組みを積極的に実践し、その進捗状況を報告・公表する。第 2 に気候変動の結果とともに生きていかなければならないユース、移民および難民といった人々を意思決定に参加させることが大切だと話しました。最後にロス氏は各々の大学は地域社会とともに、SDGs を元に社会に貢献するための素晴らしい仕事をしているという誇りを持ち、これからは特に異なる目標間の横断的な取り組みを意識して欲しいと強調し講演を終えました。

その後、富士アカデミック・プログラム・アドバイザーをモデレータとして、ロス氏への質疑応答が行われました。まず、コロナ禍により注目を集めるようになった分野について、ロス氏は、貧困になればなるほど病気にもなりやすく、貧困が顕著な国ほどコロナの影響が大きいと指摘しました。そして SDGs1 貧困をなくそうと SDGs3 すべての人に健康と福祉をは明確に関連していると述べました。また、アジア太平洋は自然災害の多い国や地域が多いが SDGs の中に自然災害に関連したものが入っていないという意見対しても回答しました。ロス氏は今後次世代に向けたサステナビリティの目標について議論が行われる際、自然災害に対してアジア太平洋各国で行われている研究やリサーチを活用して SDGs と繋げ、他の国々に共有することを目指したいと述べました。SDGs17 のパートナーシップについて、国際環境が急速に変化し地域紛争も頻発している状況ではあるものの、様々な障壁を乗り越えて社会的貢献ができる場所が大学であると述べました。大学はどこに位置していてもバリアを乗り越えてコラボレーションすることができる重要な機関であり、パートナーシップを組む際は力関係の不平等や不公平があってはならず、謙虚さを忘れずに取り組む必要があると強調しました。

次に、北海道大学の横田篤理事・副学長が、山口所長も冒頭に触れた THE 主催の Global Sustainable Development Congress の参加報告を行いました。会議は 5/29~6/1 までの 4

日間開催され、4つの基本テーマのもとそれぞれに基調講演、パネルセッション、アクションプランの策定が行われました。会場からの発言や議論も反映される民主的な国際会議であったと話しました。横田理事は、**Reversing the effects of unsustainable farming and fishing practices** (持続可能な農業および漁業に関する大学の可能性と能力開発) というテーマのパネルディスカッションで、日本の農業や漁業の分野における北海道大学の取り組みについて発表しました。横井理事はマネジメント層分科会で議論してきた **SDGs** を大学のマネジメントにどう生かすかについても発表で取り上げたと話しました。その結果、議論の内容を参加者にアピールでき、**SDG-UP** の分科会で世界標準の価値ある議論を積み重ねてきたことが実感できたと強調しました。会議を通して、横田理事は中東という砂漠地域の食料生産やエネルギー依存、水の貴重さなど価値観の違いを実感したと話しました。また、大学が **SDGs** 達成のために何をすべきか世界中から人が集まって直接議論するのは刺激的であり、キーパーソンとの直接対話により様々な情報収集ができ実り多い経験だったと所感を共有しました。

第2部の参加大学によるグループ討論では参加者が4つのグループに分かれ、1) インパクトランキングの **2023** の感想や **THE** への要望、2) 外部評価の活用方法というテーマで、ディスカッションを実施しました。主な意見として、総合ランキング算出のための選択項目が目標17の他に3目標というのは少ないため、今後は5から7つの目標を精査し、より多面的な **SDGs** 推進のためのアプローチを行う大学を評価するとの提案がありました。また、世界の大学のエントリー数は増えているが途上国の参加が少なく、いかに波及させていくかが重要です。加えて、エビデンスを提出する作業への理解と実際のマンパワーが足りないとの意見も挙がりました。2) については **SDGs** のフレームワークを使用することで大学の一体感が醸成される、大学のアイデンティティが非常に強まる、具体的には気候変動の取り組みが積極的に進んでいるなどの意見が寄せられました。

総括として、村田俊一関西学院大学教授 (**SDG-UP** アドバイザー) は、インパクトランキングは国際社会全体で取り組むことが必要不可欠であるが、統計的にみると欧米の産業国優位のランキングとなっているようだと指摘しました。そして、途上国や島嶼国を置き去りにすることなく、産業国とのパートナーシップにより技術を共有し格差を縮めて行かなければ偏ったものになってしまうとの懸念を述べました。また、**SDGs** 4質の高い教育をみんなににおいて途上国や島嶼国の教員養成のための国際協力を呼び掛けているが、このようなパートナーシップに我々日本の教員も対応すべきであると述べました。本日のセッションでは、北海道大学の横田理事・副学長から **THE** のサウジアラビアでの国際会議に出席し北海道大学の取り組みについて発表したとの報告があったが、アジア太平洋を代表する大学の取り組みを国際社会に印象づける素晴らしい発表をされたと強調しました。**SDGs** では、目標の第1に貧困をなくそうを策定しているが、我々もその優先順位を胸に刻み国内

外で弱者の声を拾いパートナーシップを構築していくという倫理観を持って、今後もプロジェクトを推進していきたいと強調し、ワークショップを締めくくりました。

参加大学 20 校（アルファベット順）

千葉商科大学

愛媛大学

広島大学

北海道大学

国際基督教大学

慶應義塾大学

関西学院大学

ノートルダム清心女子大学

奈良教育大学

岡山大学

大阪医科薬科大学

大阪公立大学

龍谷大学

昭和音楽大学

上智大学

創価大学

東海大学

東京都市大学

東京工業大学

東洋大学